

今回は、中日新聞の記事より紹介いたします。

いまから 30 年近く前にヨーロッパに行ったとき、イタリアは嘲笑的だった。当時のイタリアの通貨はリラだったけれど、リラはたえずその価値を下落させていた。政権は毎週替わるといいたくなるほどに不安定で、首相が代わっても小さなニュースにしかならなかった。大きな企業もほんのわずかしがなく、「イタリア人がいなければイタリアはいい国だ」などという言葉が、ヨーロッパの街では通用していた。ところがそれから 10 年もすると、評価はガラリと変わる。その頃ヨーロッパの国々は、経済不安と失業率の高止まりが常態化していた。1960 年代の労働力不足を補うために、アフリカ諸国などから招き入れた外国人労働者を標的とするネオナチ的動きも表面化し、フランスでは国家主義的な正統、国民戦線が 10% を超える支持率を獲得するようになる。自分もいつ失業するかわからないという不安が、人々から余裕を失わせていた。この時代にイタリア人の人々の暮らしは「健在」だったのである。イタリア人の人々は、自営的な職人仕事やサービス業、1 次産業などで暮らしを築いている人が多い。いわば企業に依存している人が少ないのである。彼らは国の経済がどうなろうとも、そんなことには影響されない自分の仕事の世界をもっている。しかも人々は、力強いコミュニティとともに暮らしていた。地域の食材や伝統的料理法を大事にしながら、食事とともにある人々のつながりを守ろうとするスローフード、スローライフ運動も、イタリアから生まれてきたものだった。ヨーロッパ諸国の人々が不況で暗くなっているときに、イタリアの人々は幸せそうに、コミュニティとともにある暮らしをつづけていたのである。1990 年代になると、「イタリアの強さ」にヨーロッパの人々は目をむけるようになる。国としてみれば、それほど強い国ではない。GDP(国内総生産)も、先進国としては見劣りがする。政治はいまでもスキャンダルにまみれている。しかし人々は、どこよりも幸せそうなのである。それは自分ならではの仕事と強いコミュニティをもつ人々の強さだった。今日のヨーロッパには、いつ経済危機がはじまるかもしれないという不安が広がっている。そんななかで、「イタリア人は打つ手がなくなってダメになるかもしれないが、イタリア人は大丈夫だろう」という言葉がイタリアを知る人の間では流れている。私たちが目指すべきなのは、こんな自立性と柔軟性をもつ社会なのかもしれない。国の経済や政治にさほど影響されない確かな「我らが世界」をどうつくるのか。そのためにはどんな労働の仕方とコミュニティがあればよいのか。私が原発は廃止すべきだと考えている理由のひとつもそこにある。原発事故は、自立的な暮らしをつくろうとしてもどうにもならない現実を生み出した。国と共に右往左往するしかない現実を、である。国の経済や政治はどうでもよいと言っているのではない。そこでも、やらなければいけないことはいっぱいある。だが最終的に私たちが目指さなければならないものは、国の動向だけに支配されない自立的な地域の確立であり、私たちのコミュニティや暮らしの創造なのだと思う。国の GDP や政治に支配されつづける時代は、そろそろ再検討してもいい。

Q1: イタリアは30年前どんな国だといわれていましたか？

A1: ()

Q2: イタリア人的な生き方・考え方をどう思いますか？

A2: ()